

# 心理学のきょうだい研究における一考察

## —カイン・コンプレックスの意義—

菅野陽子\*

### 要約

かねてより筆者は旧約聖書の「カインとアベルの物語」に注目してきた。まず人類の最初の殺人が兄弟間であったことを告げていることである。次に、兄のカインが弟のアベルを殺して、神から罰として荒野に追放されても、なお、神の加護により印をつけられ生き延び、子孫が繁栄していくことである。これら一連のことはキリスト教の思想に反映されていると考えるが、ここでは旧約聖書における兄弟間の複雑な心理、すなわちカイン・コンプレックスを取り上げて検討する。

さらには現代の日本における「きょうだい」の関係には、自立できないきょうだいを、親が亡くなった後支えるのは誰かという新しい社会問題も起きている。今、きょうだいの関係を深層心理学から再考する意義がある。

キーワード 旧約聖書 きょうだい カイン・コンプレックス 深層心理学

### 目次

はじめに

1. わが国の心理学におけるきょうだい研究
2. カイン・コンプレックス
  - 2.1 旧約聖書の「カインとアベルの物語」
  - 2.2 アブラモビッチによる理論分析
    - 2.2.(1) 「カインとアベル」についての分析
    - 2.2.(2) 「エサウとヤコブ」におけるカイン・コンプレックス
  - 2.3 きょうだい間コンプレックス
3. 考察
  - 3.1 カインの自我発達（思春期危機）
  - 3.2 スケープゴートとしてのカイン（家族間コンプレックス）
  - 3.3 深層心理学におけるきょうだい間コンプレックス
    - 3.3.(1) フロイトの観点（エディプス・コンプレックスの変形）
    - 3.3.(2) ユングの観点（きょうだい元型）
  - 3.4 アドラー心理学のきょうだいの扱い（家族布置）
4. 結論
5. 今後の展望

## はじめに

オリンピック・パラリンピックの開催時には、こぞってメディアはメダリストたちの彼らの家族の物語を取り上げる。ひとびとの関心事であり、また多くの人の涙を誘うことになる。2016年8月、リオデジャネイロ五輪開催中に読売新聞社は独自で以下の調査を行っていた。<sup>[1]</sup> 日本代表選手約100人の親を対象に聞き取りした結果、選手の6割はきょうだいの影響か、親の勧めで競技を始めていたということが判明した。特にきょうだいと同じ種目の五輪の代表であると話題も盛り上がり、仲の良いきょうだいとその親といった家族のきずなが取り沙汰される。そして、ひとびとは選手たちのそういう姿を観ることで、日本人の家族が健全であると安心感を持つのではないであろうか。著者はきょうだい間のライバル心や互いの葛藤というものの方に興味をもつ。本論のテーマに関わる事象である。

長らく筆者は旧約聖書<sup>[2]</sup>の「カインとアベルの物語」にとらわれていた。幼少期からキリスト教にふれる機会があり、聖書によれば人類の殺人はアダムとイブの子どもである「兄の弟殺し」から始まったという「事実」にショックを覚えていたこと。つまり、殺人は人類の歴史が始まって早々に起こっており、しかもきょうだい殺しであることに、幼児体験としておぼろげにでも、「人間は罪を犯す弱いものである」ことや、「神様はお見通しである」といった教訓を少なくとも人格形成に影響を与えるほどに刷り込まれた。それらはいつの間にか、おとぎ話として精神的な影響力は影をひそめていった。

ところが21世紀に入り、犯罪被害者等のボランティア支援者としてかかわっていた時、犯罪被害者および遺族の理不尽な立場への憤りを感じたりしていたが、雑誌の特集記事「復讐はなぜ許されないのか」を読んで、前述の「カインとアベルの物語」のことが急に思い出された。寄稿者のなかの1人、作家の東野圭吾氏の原稿の題名は「わたしが現代版“仇討ち”を描いた理由」で、副題には「この国の法律は犯罪者に有利にできている。犯罪者は罰として、社会から少し権利が奪われるべきなのです」<sup>[3]</sup>とあった。

「なぜ加害者の権利が“手厚く”守られているのか」「被害者の無念を晴らす方法はどこにもないのか」といった現代の法治国家にあるわれわれの疑問は、まさに「カイン」が殺人の加害者で「アベル」は殺害された被害者であり、「神」は法律に置き換えられる。ここで問題は、加害者はアダムとイブの自分たちの息子であり、無念を晴らしたいという遺族はアダムとイブ当人たちなので、相当複雑になる。

これらのことはのちに本論の2. カイン・コンプレックスで詳述するが、ともあれ「仇討ち」を禁止している近代国家の人権擁護の考え方にはキリスト教の理念が確固としてあるはずで、まさに「カインとアベル」の結末を知っていればうなずける。だが、なぜ神はカインを生かして子孫の繁栄を許したのか—旧約聖書では、ノアの一族以外の人類は大洪水で滅ぶことになるのだが—(JSB: 創: 6-10) しかもカインを「カインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう」と印(スティグマ)を付けて、その命を擁護させたのかは、理解できないことがらであるが非常に興味がわいた。それ以来、筆者の頭から離れない

物語であった。

ここでは、カインとアベルの物語を宗教的観点から論述することが本来の目的ではなく、家族である（と一般的にいえよう）きょうだいの存在とはいったい何かを検討することが目的である。その方法は、心理学できょうだいについての先行研究にふれて、つぎに旧約聖書に語られた「カインとアベルの物語」と「ヤコブとエサウの物語」の2つを素材に、家族のなかのきょうだいとは何か、特に同性のきょうだい（兄弟）を論じる。本論を書くにあたって非常に影響を受け、また引用箇所がかなり多いのであるが、ユング派のヘンリー・アブラモビッチ（Henry Abramovitch）の著作 *Brothers and Sisters MYTH AND REALITY* (2014)<sup>[4]</sup> である。（以下、B&Sとする）筆者は、この原書に出あいカイン・コンプレックス<sup>[5]</sup> という概念について興味をひかれた。この用語は日本の心理学の分野であまり使用されていないと当初筆者は思ったのであるが、実は文学や評論の分野においては、一部には心理学の用語として知られていて論旨に用いられており、次の1. において紹介する。

一方、冒頭の新聞記事とほうらはらに、戦後団塊世代のきょうだいが、相続をめぐるきょうだい間の仲が悪くなり、絶縁状態にある者も少なくないという。筆者の周囲でも友人・知人含め似たような話をしばしば聞く。もちろん、そういったトラブルもなく、また親の代わりに自立できないきょうだいの面倒をよく見る人たちも多いが、我が国の新しい社会問題ともいえることがらの1つであろう。また年代にかかわらず、近年我が国では親子、きょうだい、配偶者同志など「親族間」の殺人事件が頻発しているように推察していたが、実際のデータが親族間の殺人が上昇に推移していることを物語っている。法務省の報告<sup>[6]</sup> によれば、戦後の殺人事件の認知件数は昭和29年の3,081件をピークに、その後平成元年頃まで、穏やかに減少傾向を示した。その後平成21年以降、件数がやや減少し、1,000件～1,100件の発生が認知されている。問題は、その主たる被害者との関係であるが、法務総合研究所の調査によるもので、総数（234）の30.3%が親族であった（平成22年度 犯罪白書特別調査）。別の資料<sup>[7]</sup> によれば、「親族間」の殺人は2003年までの過去25年間、検挙数の40%前後で推移してきたが、2004年に45.5%に上昇し、以後の10年間でさらに上昇を続け、2012年、2013年には53.5%まで増加したという。

親族間の殺人というものは急激な時間幅のなかで増加していたと筆者は思ったのだが、それは思いこみであり、平成に入ってから発生する殺人の3割から4割は親族間であったわけである。「家族や親族が殺人対象になるということはよほどのことがない限りはない」という先入観であった。毎日のように耳にするニュースからは老若男女の加害者・被害者がおり、「超高齢化による老老介護」、「育児ノイローゼ・養育疲れ」あるいは「長引く不況による経済的困窮」などが背景にあるとされている。しかしながら、残念なことにこの法務省の報告からは、「親族間」のうちの「きょうだい間」の殺人の割合は不明である。また、異性きょうだいなのか、同性きょうだい同士のものなのかの割合はさらに知ることはできない。メディア等を通じて殺人事件としてきょうだい間殺人であることを知り、マスコミの情報からそれら事件が起きた原因が何であるのかを各事件によって推測するだけである。同性きょう

だい間の殺人が「カインとアベルの物語」と共通して「カイン・コンプレックス」が存在していたかどうかは知るよしもないが、きょうだい研究が進むことで少なくともきょうだい間の関係が最悪になるのを予防することができるのではないだろうか。

きょうだい関係がどのように変化するかは、それぞれの気質、パーソナリティ、出生順、幼少時代のきょうだい関係と親の子どもたち（きょうだい）への対応はじめ個人をとりまく環境がどうであったのかなどが、深く関連すると思われる。その意味でも、きょうだいの関係についての研究は意味があり、これからは生物・心理社会的な面から質的研究をする価値がおおいにあると考える。

## 1. わが国の心理学におけるきょうだい研究

アブラモビッチは、まず深層心理学（depth psychology）<sup>[8]</sup>におけるきょうだい研究がないがしろにされてきたと主張している。さらにユング<sup>[9]</sup>とフロイト<sup>[10]</sup>がギリシア神話ではなく聖書からインスピレーションを用いたとしたら何が起こっていただろうと以下のように指摘する。「ギリシア神話にはクロノス、オディプスやデメテルのように親子間の葛藤で満ちているが、聖書の特に旧約聖書には世代間の葛藤はほとんどない。そのかわり、主要な情動的力動がきょうだい間にあり、ギリシア神話にはほとんどないものである。オッデセイとオディプスのような偉大なギリシアの英雄は1人っ子であった」（B&S：1：p1）

その指摘に刺激され、わが国の心理学関係のきょうだいに関する先行研究を調べることにした。CiNii<sup>[11]</sup>を用いて検索したところ、きょうだいと心理で258本の論文検索がされ、兄弟と心理で80件がヒットしたが、きょうだい葛藤で検索すると6件であった。この検索の後J-STAGE<sup>[12]</sup>において検索すると、さらに5件増えて11件であり、これらはすべて心身医学の分野で発表されているものである。カイン・コンプレックスはCiNiiでは、わずか4件で、J-STAGEでは、1件のみで美術教育の領域のものである。

上のCiNiiでヒットしたカイン・コンプレックスに関する4本の文献のうち、本研究に参考になるのは諸井（1992）の「カイン・コンプレックス」<sup>[13]</sup>、小谷（2004）の「昔話・神話に見られるカイン・コンプレックス」<sup>[14]</sup>および心理学専門雑誌「プシコ」（2004）に掲載された記事「カイン・コンプレックスに見る兄弟葛藤の意味—自尊心の傷つきは何をもたらすのか（特集 兄弟姉妹の研究—今月は兄弟編）」<sup>[15]</sup>の3本であったが、前2本は心理学の専門家による著作ではない。しかしながら、特に児童文化論者の小谷の論文は3.の深層心理学におけるきょうだい研究について検討する際に、筆者にとって貴重な資料となり、また国内外の民話はじめ興味深いきょうだい研究の資料を提供している。また、作家・評論家である諸井は雑誌「諸君！」の連載記事のなかで、「高知で高校生の姉が中学生の妹を刺殺した事件が起き、物議を醸している。世間はことさらびっくりしているが、少しも驚くには当たらない。二人きょうだいがあらゆる人間関係の中で最も共存し難い危険な関係であることを立証する材料なら古今東西どこにでも転がっているからだ。遠くは旧約聖書に出てくるアダムの子アベルとカインの兄弟の争いを元に名づけられた心理学用語“カイン・コンプレック

ス”を持ち出すまでもなく（後略）」と冒頭で述べている。そこで1992年に姉妹の姉による妹の殺人事件が起きたことを知る。その後、2004年にカイン・コンプレックスに残る3本の文献があり、現在に至るまで論文のテーマに選択されることはなかったとみられる。

2004年というのは、既述したようにわが国の殺人事件の件数は減少している傾向になりながら、この年を境に家族・親族間殺人の件数が急に上昇した事象があり、この社会現象と関連があるであろうか。しかしながら、心理学の分野ではきょうだい研究がされてはきたが、きょうだい葛藤をテーマにした論文は少なくとも目立つことはなかったといえよう。

もとより家族研究は、家族社会学の分野で進んでおり、家族心理学はそれにけん引されて発展してきたともいえよう。その家族社会学者、菅米地（2013）は「社会学の領域における教育達成研究は個人の地位達成がどのような要因の影響を受けて決まるのか、複数の要因の中でどの要因の影響が強いのかなど着眼点はさまざまであるが、実に多くの研究がなされてきた。しかしながら、キョウダイ（原文のまま）関係の影響やその相互関係は相対的に無視されてきたといえる」<sup>[16]</sup>と指摘している。「たとえ同じ定位家族<sup>[17]</sup>内で育ったキョウダイでも、出生順序や性別、出生間隔など要因によって違ってくる」ことの原因について「近年ようやく研究がおこなわれるようになってきたが、蓄積が十分とはいえない」とし、心理学視点にたつてきょうだいは互いにその（教育）達成や発達に影響を与える存在であり、きょうだい同士で相互作用が個人にとって重要であることを、既存の研究の知見を中心にその内容を整理して、きょうだいの教育達成格差のメカニズムに関する理論的考察を試みている。

菅米地によれば、心理学の領域において、きょうだい関係への関心があらわれはじめたのは、1980年代後半であるとされるところとして、その目的はおもに家族内・きょうだい内における位置、つまり出生順位が個人の社会に対する適応や発達に対して影響することを明らかにすることであったという。また、出生順位の効果について言及したものとして、アドラー<sup>[18]</sup>による一連の研究成果を評価している。彼の個人心理学のなかで、その個人が他のきょうだいがいることによって、個人が励まされたり自信を失ってしまったりというように、精神レベルでの影響がもたらされていることを示している点が重要なポイントであるとする。しかしながら、あくまでもパーソナリティ形成に対するきょうだい関係の影響のみに言及していることには注意が必要であろうと影響の方向性に関して明確な言及がなされていないことも示唆している。その他、きょうだい抗争（Sibling Rivalry）を主張した研究は、きょうだい関係は親の愛をめぐって本質的に競争的で葛藤的であるという、きょうだいの存在を敵対的なものであると強調しているという。

他方、社会心理学者の平山（2016）は親の選好という面から、子どもたちに対する親の偏愛（favoritism）は家族研究の分野で1つのテーマとして確立していると述べている。国外における偏愛の研究は、子どもがおとなになった中年期以降の後も対象に行われ、この場合、親は高齢の親、特に母親が多いという。一般的に持たれる長子のイメージと合致し、長子は大きくなってからも、親から「いちばん頼りになる子」あるいは「頼りになってほしい子」と期待がある傾向がみられるという。しかしながら、長子が誰かという点で、中間子や末子が



誰かは比較的変更が起りやすいので、長子以外の報告に関しては慎重に解釈しないといけないであろうと指摘している。<sup>[19]</sup>

ただいえることは、親の偏愛はどのような場合にもきょうだいの関係に暗い影を落とし、現在我が国でまさに問題となっている団塊世代における老親の介護や親の死後相続でトラブルが多発していることにつながっていると考えられる。平山によれば、親に差別されたという記憶は年月を経ても消えることはなく、きょうだいとの葛藤を生じやすくするという。また、親が特定の子どもに強い愛着を感じていれば、どの子どもも少なくとも「親は自分たちを同じように好いてはいない」ということに気がつくことは確実であると主張している。これらのことから、きょうだい抗争がもともとある上に、親の偏愛があれば、きょうだい葛藤は拍車をかけることになるであろう。

筆者にとっては、苫米地の研究からきょうだいの存在と個人が受ける影響についての知見は参考になり、また多くの研究ではきょうだい関係よりも親子の二者関係に焦点が当てられているため、きょうだい内での相互作用についてあまり触れられていないことがわかった。そのほか、教育達成に対する家族に関連してきょうだい研究が盛んであり、量的研究の先行研究は我が国の家族、親と子どもたち、すなわちきょうだいの関係を理解することに一助となるであろう。

きょうだいに関連する研究において、地位達成を示すひとつの指標としての教育達成が盛んであるが、それは日本人のいわゆる教育に対する熱心な国民性もあると考えられる。また、一方で少子化により、きょうだいの研究に対する研究者の動機づけが高まらないということもあるのではないか。しかしながら、日常の会話から推測するに、きょうだいを持つ個人のきょうだい格差<sup>[20]</sup>を感じる者が少なくない。なぜ家族内での差異がみられるのか、ということについて苫米地は心理学の分野から考察することを試みているが、筆者はきょうだいコンプレックスすなわちカイン・コンプレックスについて検討し、ひいてはそのような分野へヒントになればと考える。なぜならば、カインとアベルの物語を読めばわかるが、カインとアベルの2者と神との関係が浮き彫りされるが、アダムとイブ（両親）との関係はまったく説明がなされず（神の愛を巡るとも解釈されるが）、兄弟間の殺人が突如として起こるからである。これは現代のきょうだい間殺人にも示唆を与えるといえよう。

## 2. カイン・コンプレックス

### 2.1 旧約聖書の「カインとアベルの物語」

先の1. で既出の深層心理学は、注[8]にあるように、確かに古い用語であるが、ここでは分析心理学の祖であり、フロイトと並んでこの分野での先駆者であるユングの系統であるユング派のアブラモビッチの独自の考えを紹介する。そこでは“depth psychology”という語が使用され、フロイトやユングの考え方にも触れるので、本論ではあえて深層心理学という用語を使うことにした。

カインとアベルがアダムとイブの子どもであることを知っている日本人は少なくないと思

うが、物語の内容について正確に知っている者はあまりいないのではないか。2016年秋にフジテレビで「カインとアベル」（原作・旧約聖書とある）とそのままの題名でドラマが放映された。兄と弟のライバル心を扱ったものであるが、その内容は原作とは全く異なるものであった。主人公を人気アイドルが演じており、その視聴者の多くは若者と思われるが、気になってわざわざテレビをつけた筆者には心外であった。

そこで聖書から物語の一部を引用する。(JSB：創：4)

さて、アダムは妻エバ（イブ）を知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。時を経て、カインは土の実りを主のもとに<sup>ささ</sup>げ物として持ってきた。アベルは羊の群れの中から肥えた<sup>ういご</sup>初子を持ってきた。主はアベルとその<sup>ささ</sup>げ物に目を留められたが、カインとその<sup>ささ</sup>げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。主はカインに言われた。

「どうして怒るのか。そうして顔を伏せるのか。もしお前が正しいのなら、顔をあげられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」

カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。

以上が、兄が弟を殺すという人類初めての殺人となった経緯である。その後、神に「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」と問われ、カインは「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」と答える。神はカインにその罪に対し、呪われた者になり土を耕しても、作物ができず地上をさまよい、さすらう者となると罰を下す。

カインは恐れおののき、「わたしの罪は重すぎて負いきれません」「わたしは<sup>みかお</sup>御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者となってしまうえば、わたしは出会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」と神に言うと、神は、「いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう。」とだれも彼を撃つことのないように、カインに印をつけた。こうして、カインは生きながらえることになったのである。

それからカインは神の前を去り、エデンの東、ノド（さすらい）の地に住んだ。後になって、カインの5代目のレメクは2人の妻をめとる。妻の1人はアダでヤバルを産む。ヤバルは家畜を飼い天幕に住む者の先祖となった。その弟はユバルといい、豎琴や笛を奏でる者すべての先祖となった。もう1人の妻はツイラで、トバル・カインを産んだ。彼は青銅や鉄でさまざまな道具を作る者となったという。

筆者は、この文脈にも注目している。それは後述する考察においてカインをスケープゴート<sup>[21]</sup>ととらえる観点を展開する鍵となっているからである。単純にここの部分を読むと、神は罪人であるカインを生かし、また妻を与えて子孫が繁栄していったことになり、筆者の

ような信者でもなくかつ凡人には不可解なところである。

しかしながら、神は被害者遺族である（加害者の両親でもあるが）アダムとイブに理不尽ではなかった。再度、創世記4章の最後の部分を引用する。（JSB：創：4）

「再び、アダムは妻を知った。彼女は男の子を産み、セトと名付けた。カインがアベルを殺したので、神が彼に代わる子を授け（シャト）られたからである。セトにも男の子が生まれた。彼はその子をエノシュと名付けた。主の御名を呼びはじめたのは、この時代のことである。」

筆者が子どもの頃にはなぜアダムとイブしかいなくて地球上に人類が増えたのか不思議だったが、ここでアダムの系譜により子孫が繁栄していくことが説明されていると、もちろん神話として、であるが理解できる。以下、その引用の続きである。

「アダムがセトをもうけたのはアダムが130歳になったとき、自分に似た、自分をかたどった男の子をもうけた。アダムはその子をセトと名付けた。アダムはセトが生まれた後800年生きて、息子や娘をもうけた。アダムは930年生き、そして死んだ。」（JSB：創：5）

## 2.2 アブラモビッチによる理論分析

前述したように、アブラモビッチは深層心理学の分野においてきょうだいの扱いはないがしろにされたとみている。その理由を2大創始者のジークムント・フロイト（Sigmund Freud）とカール・グスタフ・ユング（Carl Gustav Jung）が長子であり、優秀で成功した子どもだったので、他のきょうだいたちやきょうだい問題に無意識に関わらなかったため、子どものきょうだい愛（sisterhood and brotherhood）に関心がないという「出生順位の偏見birth-order bias」によるものと、大胆な仮説を立てている。彼にとっては、きょうだい時代は人生早期のもっともパワフルで集合的な経験を与える時である。それをあろうことか、フロイトは夢判断で「げっ歯目科の小動物（たとえばネズミなど）」をきょうだいと解釈すると彼は揶揄している。フロイトは複数いるきょうだいのなかで親から最も優遇されており、妹のピアノの音が勉強の妨げになると不満をもらすと、母親はピアノを取り払ってしまったという。

ユングの方は対照的に9歳まで1人っ子だったが、妹が生まれた。彼女はユングの人生で何の目立った役割をしなかった。だが、ユングは「いつも私にとって奇妙な人物であったが、おおいに彼女には尊敬を払った」と述べていたという。アブラモビッチは、このことはきょうだいの年齢差が7、8年以上あることは、きょうだい間の親密なりビドー<sup>[22]</sup>の心理学的限界を示していると推測している。その妹は終生結婚せず老いた彼らの母親の世話をしてから亡くなった。ユングは妹を失ってはじめて彼女の存在を深く感じたという。このユングのただ1人の妹との関係は、差異心理学の本質に関する理解に貢献したのではないかと、彼は



述べている。

また、『太母<sup>[23]</sup> (Great Mother)』と特に母子（乳幼児）相互作用<sup>[24]</sup> (mother-infant interaction) の重要性が増大した結果とみる。フェアバーン、クライン、ウニコットなど代表的な分析家たちも、母子（乳幼児）相互作用が心理発達の危機的段階であることを強調している。そのために、単純にきょうだいの出番がない。心の現実において再登場がなく、少なくとも理論においてきょうだいは心理学的に不在となってしまった」と指摘している。(SB:1:5-6) そのなかでユングはきょうだいの元型 (archetypes) の重要性については理解していたとアブラモビッチは評価する。しかしながら、ある個人が1人の姉（妹）であることと1人の兄（弟）を持つことの核には何があるのか、きょうだいの元型的な経験の本質とは何か、それらのことを検討するのに、彼は旧約聖書からおおいに鼓舞されたのである。以下アブラモビッチ独自の「カインとアベル」の深層心理学的分析を中心に、カイン・コンプレックスについての知見を紹介していく。

## 2.2. (1) 「カインとアベル」についての分析

原著 (S & B) の第4章「兄弟愛のダークサイド (The Darker Side of Brotherhood)」のなかで、彼は長子（ら）の運命を調査するために、旧約聖書のヘブライ語訳で詳細に分析を試みたと述べている。そこには実際のことばには表されていないが、非常に情動的なストレス下にある人間行動が相当じゅうぶんに露呈されているという。旧約聖書を読むには「積極的なイメージをすること」の必要があると指摘する。

最初の兄弟（カインとアベル）の誕生の描きかたでは、創世記4の双方の最初の対照的な出だしが、出生順の心理的力動について明らかにしている。カイン、すなわち子宮を開いた者、は特別である。彼は「アダムの子」でもなく「イブの子」でもなく彼自身の権利として唯一人の者であると「カイン」と呼ばれる。そして、この文脈は、神秘的で神聖な特別な最初の子という母の体験を反映しているとアブラモビッチは確信するという。イブの夫ではなく、彼女が名前をつけてアイデンティティを与えたが、このことは、我々後世の運命の内的感覚を与える太母であるとみている。

最初に生まれた子どもについて、次のようにいう。最初の子は有利な立場にある。年長の子は成功したり、道徳的であったりする。また信頼されリーダーシップの役割を取りやすい。そのように特別であることは、しかしながら心理的な価値を要求される。同時に最初の子は他者の要求に応じるため、成功するため、下のきょうだいを世話するため、そしていつも彼らのモデルとなるために生まれてきたと感ずるのであろう。

最初の子は両親の投影を増大させようと成長するにちがいない。イブは「私は子どもを得た」と言わず、「私は男manを得た」という。イブは「子どもを見ないで、成長した男だけを見ている」といえる。

明らかに、イブの2番目の息子はカインの1人の弟として生まれている。弟と妹の運命は、長子「のための弟」あるいは「にとつての妹」としての永遠のアイデンティティを持つこと

だ。自動的に、比較できない特別な長子と対照的に、下の子たちはどうしても比較され、それゆえ対比的なアイデンティティを持っている。年長の子たちは役割モデルをとるようにしなければならないが、下の兄弟たちは彼らに反応しないといけない。カインと比較して、アベルは説明もなく名前が与えられたが、これは後から生まれた子は両親の希望や投影が長子より集中しないことを示している。(S & B : 4 : 28-29)

次に、カインとアベルの年齢差がかなり接近していると推察している。親密リビドーが高いとみる。比較することや比較されることから得た関係やアイデンティティが非常に接近しているきょうだいである。カインとアベルのような兄弟は「もう1人の」心理的存在から逃れられない。

最初の子によくあるように、カインは父親の仕事を選択する。もしもカインが農夫であったら、アベルは別の職業についていたであろうというのがファミリー・ニッチ (niches : 最適の場所、仕事) の力動である。きょうだいが1つの部屋を分け合うと、どのようにスペースを区切るか難しいことがよく起こることを例にあげている。きょうだいは、家族環境のなかで心理学的空間をしばしば区分けしているともいえる。

そして、旧約聖書の創世記について長兄と2番目の弟に関連した興味深い見解を示している。最初の子は両親からつねに特別扱いを受ける。「権利」として好きな地位を得る。多くの文化で、最初の子は特別のステイタスがあって、多大な特典、特権、特別な階級、儀式や相続などを受け取る。モーゼの法律では相続は長男に特別多く与えられる。(創 : 21 : 17) 最初の子を好む明白なイデオロギーにもかかわらず、創世記の出生の順序は著しく聖書の後の部分と異なるという。創世記では、いつも年下の息子が選ばれて父親の祝福を引き継いでいる。創世記の主な父親、アダム、ノア、ツィラ、アブラハム、イサック、ヤコブ、ユダそしてヨゼフは実際に下の息子を好んでいる。このユニークなきょうだいの現実はまるで創世記は弟の代弁者として書かれたのだろうかといぶかる。

以上のような下のきょうだいが年上に置き換わることを「王座から引きずりおろすこと (dethronement)」という。カインは1番目に生まれたが、アベルとアベルの職業が原文の最初に出てくる。アブラモビッチによれば高名なイタリア人のユダヤ教聖書学者カースト・Uは、それは文字通りの出生順ではなくて、傑出した (eminence) 順番なのではないかと論じているという。羊飼いのアベルは兄のカインとアルファ (α : 第1の) 息子として置き換えられ、そして選ばれたのである。アブラモビッチは、このことの衝撃を過小評価すべきではないとしている。子どもは深く傷つき、不公平感が続く。王座喪失させられた子どもは、永遠に拒絶された感覚をもち、その後だれかがもっと持っていくのではないかと警戒するであろう。原文ではカインがそのことへの反応した証拠はないが、アブラモビッチは「お気に入りの子ども」がいると思うどの親も、精神的な赤児殺しの罪の意識があるのではないだろうかと感じている。(S & B : 4 : 32-33)

カイン・コンプレックスの重要な観点になるが、ユンギャン (ユング派) として、一般

的にアベルを罪のない犠牲者・被害者、カインを悔いあらためない殺人者・加害者と分裂 (split) させて捉えることに異議を唱えている。それは、善 (good) と悪 (evil) の2大特質が1人の個人のなかに同時にあることを否定しようとする考え方であるからだ。アベルが理想のきょうだいで、カインが邪悪な影とみるのではなく、自分自身の善と邪悪な部分の力動的緊張が悪を他者へと投影し、一連の悲惨な破滅へと招くことになる。とみる。

アブラモビッチが好むのは、カインの「私の罪は大き過ぎるので許されないのですか？」あるいは「私の罰は重過ぎて負いきれません」(JSD：創：11：13) という二通りの訳された部分があるところだという。このバージョンはカインを大きく違う光をあてて描いている。カインの叫びはいまや一種の深い痛みの洞察である。ただ1つの神の質問と自分の罰で、自身の極悪邪道に気がついたのではないとみる。主な聖書訳は後者が多いが、コーランに引用されているMidrash<sup>[25]</sup>では、カインは1羽のオオガラスが弟を隠している姿をみて、初めて自分の行為を認識している。神は弟の裸をどのようにして隠すのかを見せるために大地を削る1羽のカラスを使わしたとある。「ああ、私はオオガラスさえにもなれないし、裸の弟を隠すこともできなかった」と、彼は後悔の念でいっぱいだったと記されている。(S&B：4：42-43)

さらにアブラモビッチが示唆していることで興味深いのは、カインがアベルを襲って殺してしまうに至るのは、カインが親によって介入されて、兄弟の立場を強化するだけではなく、おたがいの関係を悪くする可能性が高いからという推測である。また、カインは「殺す」ということはわからなかった。誰も教えなかったのだからと。

あるMidrashでは、「長いこと年月を経てカインが父親のアダムのところへ戻るといふ。アダムは驚いて『何と！お前はまだ生きていたのか』とカインにいうと、カインは『戻りました。そして和解しました』と答えた。そしてアダムは泣き自分の顔を叩きながら、『後悔 (repentance：非行などへの) の力は何と偉大なのだ！知らなかった』と泣き叫んだ」とある。この観点から、彼は悔いる罪人の元型であり、自己 (Self) の十分な存在を経験したので戻ることができた。平和な気持ちがなく、一か所にとどまることがなく、荒野をさ迷うのであるが、「さ迷う」ことはより心理学的な用語である。そして、カインは人類で初めてのホームレスであると指摘している。

これ以上は、宗教的な観点に深入りする枚挙もなく、まだ言及したい点も多いが別の機会に譲るとして、次にノアの子どもの1人セムの子孫であるアブラハムの息子イサクの双生児の息子であるエサウとヤコブの兄弟の物語をみてみよう。

## 2.2. (2) 「エサウとヤコブ」<sup>[26]</sup>におけるカイン・コンプレックス

アブラハムの息子イサクが次男であったのは、正妻サラに長らく子どもができず、ハガルという女奴隷であった側女そばめにイシュマルという息子が先にいたからである。アブラハムは全財産をイサクに譲り、側女そばめの子どもたちには贈り物を与え、自分が生きている間に東方に、息子イサクから遠ざけた。エサウとヤコブは生まれる前から運命を背負っていて、その物語

は兄弟間で色々な悪いことが起こるが最後に確執が消滅するという点で、カインとアベルの物語と異なっている。

アブラモビッチは、ときにはきょうだいの競争心があまりに緊張が高いので、破滅の宿命にあらかじめ方向づけられている感覚があると指摘する。この物語はヒンズー教 (karmic) 的な質を持っている。生まれる前からきょうだい—敵と認識している。最近の研究では、子宮内での子宮仲間 (mate) が他のきょうだいを破壊したり吸収したりしてしまうきょうだい葛藤は、特別なことではないという。両親が無意識に子どもたちの間で、自分自身のきょうだいで持っている関係を再現することがしばしばある。たとえば、イサクはイシュマルを超えて選ばれ、彼の「野育ち」のきょうだいは両価的関係になる。この経験が、好む息子と拒絶する息子の2人1組を創つただろう。だから (イサクの双生児の息子の) エサウは狩人になり、拒絶されたヤコブは天幕に住む人となったと考える。

イサクの妻リベカも同様にきょうだい問題が未解決であった。象徴的に子宮のきょうだい葛藤は以前の世代からのきょうだい力動によって増強する。きょうだいと断絶 (cut off) した親は子どもたちを彼らの家族の争いの側につかせるのを強いるかもしれない。

双生児のヤコブとエサウは極接近したきょうだいで、それぞれ強く極端なアイデンティティを持っていた。エサウは野山でどうやって狩をすればよいかよく知っていた。ヤコブは静かな天幕住居人であった。ある意味エサウとヤコブは1つの世界を分かつのに成功していた。しかし、他の意味で彼らは影のきょうだいであり、もう片方の容貌、性格、テリトリー、そして親の愛を嫉妬していた。(S&B:5:62-63) イサクはエサウを愛し、母のリベカはヤコブを愛した。イサクの死期が近づき、眼もほとんど見えなくなってきた頃長男のエサウに神の祝福を与えることを伝えていたのをリベカは耳にして、エサウが出かけた隙をねらい、ヤコブの首や手に毛皮をまきつけ、毛深い兄に似せて父のもとに行かせる。眼の見えぬイサクは騙され、地の恵と全ての民を統べる力をもたらす神の祝福を、ヤコブに譲与することを誓った。エサウは家にもどると、ヤコブが策を弄して父を陥れて、宣誓させ、神の全てを奪い取ったことを知った。エサウは悲痛な叫び声を上げ、嘆き悲しみ、父の撤回を、それが駄目ならせめて残された祝福を、と迫ったが、父は「すでに神に誓って宣べたことを、今さら」と退け、そしてさらにエサウに「穀物や葡萄酒、地の恵から遠く離れたところにお前は住む。天露からも隔てられ、お前は自らの剣を頼りに生きていく」と言った。当然のことながらエサウはヤコブを憎み、「父の死を待って後、必ずヤコブを殺す」とつぶやいた。(ドレ:創:25-27:p60)<sup>[27]</sup> このエサウの悲痛の叫びをアブラムビッチは、「人類ではじめて泣いたきょうだいである」と指摘する。エサウとヤコブがカインとアベルと異なるのは、エサウがヤコブを殺したいほど憎んでいたが、2人は生きて中年期を迎えたこと。特にヤコブは殺されると逃亡して後に様々な苦勞をして、7年経ち故郷に戻ってくるのだが、自分が牛やロバを含む家畜はもとより男や女の奴隷を持つ身となって戻ってきたことを兄に知らせる。お互いに発展した大家族であることも異なる。ヤコブは兄にそれとわかるように七度、地面にひれ伏した。エサウはといえば、ヤコブが近づくと思わず駆け寄ってヤコブを出迎え、抱



きしめ、首を抱いて接吻し、そして泣いた。(ドレ：創：33：p68)

アブラモビッチは、最後の章で私的なノートとして、実際の自分自身のきょうだいについて記述している。兄、姉と自分の3人きょうだいで、晩婚の両親が恐らく出産を急いだのであろう、わずか4年数か月の間に3人が生まれたので、接近したきょうだいであったようだ。姉とは仲良しで団結していたが、兄は自分に非常につらくあたり、気にいらないとすぐ暴力を弟の自分に向けたという。部屋もシェアしていたが、兄の意のままではほとんど兄が所有していたという。それがあつた時、アブラモビッチは我慢ならず兄にはむかっていき、兄を負かしたそうだ。そこから関係が一転して、修復されていったとのことである。

兄は常に長男のモデルを務めねばならなくてストレス下にあつたそうだ。自分は兄を尊敬していたが、兄は自分を羨ましいと思っていた。そうしてお互いを理解できるようになったと自己開示している。

### 2.3 きょうだい間コンプレックス

本論では同性の兄と弟間のコンプレックスを扱い、兄からみたカイン・コンプレックスという用語を用いて兄弟の関係をみてきた。アブラモビッチはその著作のなかでアベル・コンプレックスという用語も用いている。もちろん、弟の視点から兄へのコンプレックスも考慮すべきであろう。そして、さらに複雑な異性のきょうだいを巡って、兄弟間の兄殺しの物語を引用している。有名なダビデ王（前述したヤコブの系譜）には2人の息子長子アムノンと異母兄弟のアブサロムがいた。アムノンはアブサロムの美しい妹タマルに恋をして、策を弄し抱くが、邪悪な欲望を果たした後、一転してそれに倍する憎悪にかわり、アムノンはタマルを家からたたき出した。その顛末を知つたアブサロムは激しく怒り、心底アムノンを憎んだ。その後、アブサロムは妹の怨みを晴らすため、アムノンを撃つ。父ダビデはアブサロムを許すが、王への反逆を心に秘めて、チャンスを待つ。40歳のときに、イスラエル全土に密使を送りクーデターを起こすが、ダビデ側の隊長に殺される。結局、ダビデが再び王として自らの街エルサレムに戻り、その後もダビデ王の物語が続く。

しかしながら、タマルは女性として悲惨な体験をしながらも、その結末はまったく語られていない。それについての考察は、アブラモビッチ自身の臨床経験へとつながっていく。著者も臨床場面において、クライアントがその主訴の背後に、同性はもちろんであるが異性の同胞の問題があつてカウンセリングを受けに来たという経験はまれではない。

アブラモビッチは人類学の碩学でもあるので、豊富な民族の古代の神話や世界上の異文化について詳しい知見が著作に詰まっている。旧約聖書のみならず、現代のグリム童話にも「兄と妹」の組合せが主人公であることが多い。またきょうだいの一番末っ子の弟が、初めは無視されているが物語の結末で勝利のヒーローになるというパターンは92%であると指摘する。神話やおとぎ話などに出てくるきょうだいの物語の伝えることは、深層心理学的にも宝の山といえよう。

異性のきょうだい物語として日本の昔話では、「安寿と厨子王」が、姉と弟が離れ離れに



なるが最後は再会して喜びあう。そこには愛慕する老母の存在がある。グリム童話の「ヘンゼルとグレーテル」は、子捨ての物語で、一度は両親から見捨てられるが、兄と妹が団結して魔女をやっつけ、宝をもって家族のもとへ無事生還する。世代間の葛藤においてかなり違うと思われるが、アブラモビッチが示唆することがいえるかもしれない。それは異性きょうだいのエロティックな近親相姦的ファンタジーは古代からの誘惑かもしれないが、現実には圧倒的に回避されるべく事象であるという点である。

実際に幼い妹である少女たちが「大きくなったらお兄ちゃんのお嫁さんになる」というのを何度も聞いたことがある。しかし不思議なことに、自然にそのようなことは言わなくなる。もっといえば、思春期になると毛嫌いすることさえある。そういった意味で、たまにニュースになる異性間の殺人には、どういった葛藤があったのかと疑問をもつのである。

ともあれ、アブラモビッチは人類学にも精通していて、心理学と人類学ではあまりにきょうだいについての記述が異なることに驚嘆している。特に深層心理学においては、意識と無意識の葛藤、ライバルを王座から引きずりおろすことやエディプスコンプレックス的きょうだいの三角関係における結婚、妻に対する夫の暴力の葛藤の置き換えなどがある。一方人類学ではきょうだいをポジティブにとらえて、主要な社会との接着剤であるとする。一般的に、きょうだいはどんなに争っても、外から脅かすものをかわし団結するとみる。(S & B : 2 : 14)

しかし、兄弟コミュニティと姉妹社会が同じような条件に向かっていくと、民族的な集団同一性は極化され、不正や屈辱の自認がなく、その結果は集団的兄弟暴力や民族的暴徒となりうるとアブラモビッチはいう。そして、引き起こされている多くの社会的民族的な暴力行動は、個人であれきょうだいのような民族集団であれ、きょうだい心理学に根ざしていると示唆している。(S & B : 4 : 48)

### 3. 考察

#### 3.1 カインの自我発達（思春期危機）

本章では、聖書について、独自のカイン・コンプレックスとそれをめぐる今まで論じてきたことの考察を述べていきたいと考える。ただ、カインがアベルを殺害し、神の質問に答えたとき、カインは自我の目覚めがあったと観るのはアブラモビッチも指摘するが、ここではシュタイナーの解説を引用しよう。

「元来、人類は男であると同時に女でした。後になって男の性、女の性に分かれたのです」と、現代人の私たちにはなじみにくいですが、まずカインのなかには男性、すなわち物質的なものが働いており、アベル—セト（アダムの三男）のなかには女性、すなわち霊的なものが働いているという。『カインは土を耕す者になった』というのは、太古の意味では「彼は物質界で生きることを学び、物質界の人間になった」ということです。これは男性の特徴でした。…『アベルは羊飼いだった。』羊飼いは、神に生命を差し出すために、生命

を取り上げます。羊の群れを育成するのではなく、ただそれを見守るのです。…群れの番人、神が大地に移植されたものの番人、それはアベルです。自分自身で努力してなにかを得る人、それはカインです。カインはギター演奏その他の諸芸術のための基礎を築きました。(創：4：21-22節) さて、神に対する態度においても、対立が生まれました。アベルは霊を受け入れ、供物として最高のもの、霊の最も高次の実りを捧げました。神は喜びの眼差しを供物にむけました。なぜならば、それは神自身が大地に植えたものだからです。カインは少し違いました。彼は自分自身の思考の産物で、神に向かおうとしました。それは神にとって全く未知のものであり、人間が自由のなかで獲得したものでした。カインは芸術と科学に向かって努力する人間です。しかしそれは神の血筋ではありません。…中略…『どこに、おまえの弟アベルはいるか?』という神の問いに対して、カインが『いったい、私は弟の見張り番ですか?』と答えた時、何が地上にもたらされたのかが、見えてきます。以前の人間でしたら、決してこのようなことは言わなかったでしょう。霊的なものに反発する知性でなければ、こんなことは言いません。今や、戦いの原則、対立の原則が、愛の原則の中に混入するようになりました。『いったい、私は弟の見張り番ですか?』。エゴイズムが生まれたのです。』<sup>[28]</sup>

長い引用になったが、シュタイナーの解釈は神秘主義的といわれるようにすべて了解することは難しいながら、筆者にとってカインとアベルの物語を理解する大きなヒントとなった。カインはエリクソン<sup>[29]</sup>の発達理論における発達段階の「青年期」(思春期)にあたり、まさに「自我」が芽生え、精神的にも肉体的にも著しい変化があるときである。この時期の発達課題は「同一性」対「同一性の混乱」であるが、先の神との対話にそれをみてとれる。「私は何者か」とカインは自問自答していたのだろう。そのときに、最高権威者である神から捧げ物を評価されず、辱めを受けたと思う。褒められた弟は自我の目覚めもまだなく、きっと神からの称賛を素直に受けていたに違いない。兄は弟に慰めてもらいたかっただろうし、傷ついた気持ちを共有する相手もいなかったのであろう。自己肯定感は低下し、ひどい孤独感に悩みうつ状態に陥るかもしれない。しかしながら、カインはその感情を弟に投影し、激しい怒りを攻撃という形で表現した。そして、思いもよらぬ結果を招いたが、彼の良心(スーパーエゴ)は彼の自我(エゴ)を支配することができなかった。神に「お前はそれを支配せねばならぬ」と指摘され、かっとなったのは思春期心性である。そして殺害してしまった後、神にアベルの居場所をたずねられ、「自分は弟の何であるか」ではなく「自分は何者でもない自分である」と反発する。

アブラモビッチはこの場面での神の対応は、セラピストとして「失敗」していると興味深い観方を示しているが、筆者には失敗してしまった結果、神がカインの思春期心性を了解し、しかしながら思春期・青年期をかけて物理的にも精神的にも各地を放浪するという罰を与え、このことは人間が青年期に自我同一性を獲得するために非常に苦しむ期間があるという示唆でもあろうし、カインを赦し生かしたのだと考える。人間は変わることができるという普段

の私たち臨床家の姿勢にも通じる。

### 3.2 スケープゴートとしてのカイン（家族間コンプレックス）

青年期にカインがさしかかっているということで、筆者はもう1つの観点から考察を試みた。マーゴ・ワデル（Margot Waddell）（2000）は「スケープゴートはしばしば特徴的な人間関係と機能の様式を明確に描いている。その関係のあり方はなにも青年期だけに特徴的なわけではないが、特に十代の人間にはっきりあらわれるものである」<sup>[30]</sup>と指摘している。スケープゴートとは、他のものの罪のために非難されたり、罰せられたりするものを意味するが、最近ではいじめの構造などの説明に用いられることがあり、集団や個人の力動にかかわる複雑な背景がある。ワデルはスケープゴートが普通使用されるのは「ギャング集団が受け入れ難い側面を他者に背負わせ、その他者を迫害する過程であるが、その結果、その他者は自己の一部であると認め難い感情の貯蔵庫となる。その機制は投影性同一化なのだ。それはまた階級、性別、人種、宗教、政治団体などに関係するすべての迫害状況の基底にある機制である。」とし、これがいじめの源泉になると説明する。注目すべきは、ワデルがスケープゴートの心的現象を考察する際に、もともとこの用語の起源となる旧約聖書のヘブライ人の贖罪の儀式を参考に行っていることである。

詳細は省くが、ワデルは原典（創：レビ：16章）の細部が、取り入れより投影の様式が支配的であるという青年期に特徴的な精神状態と類似した点が見られるからだという。贖罪の日は犠牲の山羊とスケープゴートの2頭の山羊が用意される。レビ記に、ユダヤ人の罪を贖う方法について神がモーセを通してアロン（モーセの兄）にどう教えたかが記されている。2頭の山羊を主の前に立たせ、くじを引く。1つのくじは主のため。もう1つはスケープゴートのためである。主のためのくじに当たった山羊をささげる。（すなわち殺して生贄にする）スケープゴートのためのくじに当たった山羊は、主の前に生かしておき、これをもって、あがないをなし、これをアザゼル（＝スケープゴート）のために、荒野に送るという一連の儀式がある。

犠牲の山羊は神の前で火にくべられるが、もう1頭の山羊はもろもろの悪をにない（山羊の頭にアロンは両手をおき、イスラエルの人びとのもろもろの悪と、彼らの罪をその上に告白してこれを山羊の頭にのせて、定めておいた人の手によって）荒野に送られるという。筆者にはこのスケープゴートのためである山羊とカインがダブってみえるのだ。

アダムとイブが犯した原罪を、アベルは間接的にはあるが主のいけにえとして捧げられ、カインがスケープゴートのために、その宿命を背負わされ、殺されることはなく生かされて、追放される。しかし長い年月を孤独と飢えをしのぎ、無事成人期を迎え、妻を得るという物語に引き付けるのは荒唐無稽な考えであろうか。

カインは自我の芽生えから家庭内で親からうとまれ、弟アベルから無視されたという想定をしてみると、最高権威者である神からも見放されたと思い、カインの不安は増大し、合理的、内省的、象徴的に考えることが不可能であった。そして衝動殺人に至った。カインの一

連の行動について、エンジェル<sup>[31]</sup>の感情の分化に対する説明が参考になる。神にささげものを褒められず、愛されたい対象への無意識の敵意は、意識的には怒りとして浮かび上がってくるが、褒められた弟から攻撃を受けるのではないかという不安は、自分が弱くて恐れおののいているという屈辱感を産みだす。この屈辱感は、怒りを解放することによって統制されるが、この場合の対象は、危険がより少なく、より近づきやすい対象が選ばれることになる。つまり弟のアベルを選んだのである。神には到底勝つことは無理なのだから。

以上、贖罪の日のスケープゴートのための山羊から、カインを結びつけた理由を述べた。言い換えると、アダムとイブと2人の息子からなる核家族のなかでの家族間コンプレックスが推測される。自我が目覚めた「扱いづらい思春期の長男」への家族の病理が兄弟殺しの元型となったのではないかという仮説を試みに立てた。両親の犯した原罪と、その息子の殺人という人間としての最大の罪、すなわち家族（人類）の罪悪をカインに封じ込めて荒野へ追放したことは、その後の人間の社会集団（その中核は家族といえよう）における1つのいじめの構造である「スケープゴートをその所属集団から追放する」というものであるといえよう。

### 3.3 深層心理学におけるきょうだい葛藤の研究

2.2で述べたように、アブラモビッチは、フロイトとユングがきょうだい問題に無意識にかかわらなかったため、深層心理学の分野できょうだいの扱いがないがしろにされてきたという観点に立っている。筆者は最後に彼のこの主張を検討することにしたいと考える。まずフロイトに関して明白なことがある。

#### 3.3. (1) フロイトの観点（エディプス・コンプレックスの変形）

まず1. でわが国のきょうだい研究としてCiNiiで検索した記事「PSIKO（プシコ）」のなかで、「精神分析を創ったフロイトはこの話（カインとアベルの物語のこと）にヒントを得て、兄弟姉妹間の無意識な葛藤を『カイン・コンプレックス』と名付けました。」「<sup>[32]</sup>と書かれてあるが、「フロイトが名付けた」という記述には疑問を持つ。フロイトの著書「『詩と真実』中の幼年時代の一記憶」においてゲーテの幼い頃のエピソード—近所の子どもたちにそそのかされて家中の瀬戸物を全部1つ残らず外へ投げつけて、舗道にたたきつけてしまった—をフロイトが後になって気になったという。ゲーテの自伝を読んだときには、小問題ととらえて長いこと放置していたのであるが、彼のところにきた患者が同じような幼年時代の記憶がもっとはっきりした弟との関連があったという。患者自身は母をめぐって弟への嫉妬が増大し、弟を殺そうと計画する。ある時その彼は手あたり次第の瀬戸物を残らず外へ投げ飛ばしたという。彼は外国人でゲーテの自伝を一度も読んだことがなかった。

そこでフロイトはこの瀬戸物壊しの1件を、以下のように説明している。

「物を壊したり、壊されたものを見たりする快感だけが問題だったら、子供はたんに壊れやすい物を地面に投げさえずれば、その快感を満足することができただろう。が、それでは



窓から外へものを投げるということが説明されない。しかしこの『出ていけ』こそ、この呪術的行為の本質的な部分であって、これは行為の隠れた意味からして発しているように思われる。新しく生まれてきた子供はかたづけてしまわなければならない。それも、できることなら窓から外へ。なぜかという、子供は、窓から家の中へ入ってきたのだから。とすれば、この行為全体は、鶴（このとり）が弟妹を連れてきたと知らされた時に、子供が示すところの、あの主値の文字どおりの反応と等価的なのではないであろうか。『では、また鶴が連れてかえればいいではないか』というのが、子供の肚である。』<sup>[33]</sup>

しかしながら、フロイトはそれでも「たった1つの類似にもとづいて子どもの行為を解釈するのは危険である」とこのことを長いこと発表しなかったが、またある日患者が1人きて、自己分析をしたという。それによれば、その患者は大勢のきょうだいの長子であるが、最初の記憶が3歳と9か月の時に、父親が「お前に弟が1人できたよ」と言われ、それから間もなくある時、靴やブラシやその他いろいろなものを、窓から往来に投げ飛ばしたことを記憶しているという。そこで、フロイトは上記の一切の疑問が消えたとして述べている。

以上のように、フロイトはその著書のなかできょうだい葛藤について説明しているが、「カイン・コンプレックス」という用語は見当たらない。またすでに1. [5] に注釈したように母親をめぐる子どもの同胞にたいする無意識的な嫉妬、憎しみ、排除の願望が存在することを述べているにとどまっている。「カイン・コンプレックス」という用語そのものは、フロイトが創作したものかどうかは疑問である。

また、フロイトによれば嫉妬は深く無意識に根差しており、未解決エディプス・コンプレックスや同胞コンプレックスに起源があるとされる。一般的に精神分析では同胞コンプレックスをエディプス・コンプレックスの変形したものと考えるので、理論分析の中心はエディプス・コンプレックスになるのは当然なのであろう。<sup>[34]</sup>

### 3.3. (2) ユングの観点（きょうだい元型）

すでに2.2でアブラモビッチのユングアンとしての主張に従うと、きょうだいの元型の重要性について言及しているのはフロイト以降の代表的な分析家のなかでユングだけである。フロイトと袂を分かつことになるのが、コンプレックスという用語を、共通の条件・条件下で形成される普遍的な心理的タイプの傾向を理解する用語としてユングが用いたことである。したがって、フロイトの系譜では、このきょうだいの元型という概念は軽視される。1. でふれたわが国の先行研究のなかで「カイン・コンプレックス」に関する4本の文献のなかで、児童文学専門家の小谷（既出）はわが国の臨床心理学者として最も著名で多大な功績のあった河合（1971）の文献を引用している<sup>[35]</sup>ので、とても参考になり、また「カイン・コンプレックス」という用語の使用時期について興味深い問題提起がある。なぜなら、その河合の著書は1971年12月に初版として出ているが、注[5]ですでに記述しているように、アブラモビッチはこの用語が初めて使用されたのは1972年としているからである。このことは



筆者はまだ調べ切れていないので、課題として残っている。ともあれ、河合は日本人初のユング派分析家であるが（1965年取得）、その著書のなかでカイン・コンプレックスについて以下のように述べている。（ある女性の症例について記述している）

「その彼女は妹への自分とは生き方の異なる妹に対する葛藤、一般に『カイン・コンプレックス』といわれているものの存在が明らかになってきたのである。旧約聖書創世記第4章にカインの話がある（中略）この話をもとにして、兄弟間の強い敵対感情—ひいてはそれが同僚に対する敵対感にも発展するが—を、カイン・コンプレックスと名づける。これはまた後にも触れることになろうが、人類の心の奥深くにある感情であり、単純なものではない。（中略）このようにコンプレックスというものは多層構造をなしている。派閥の下にまた小さい派閥やグループがあるのと同様である。つまり弱いコンプレックスもあれば、大きいあるいは強いコンプレックスもあるわけである。」<sup>[36]</sup>

さすがに河合の明解な解説である。さらには、このカインという人名を使用することの意味を次のように説明していて、まさにわかりやすく納得がいくものである。

「カインの『体験』した全て、アベルに対する感情、神に対する感情—ここで、神は何と単純には理解しがたい行動をとったことか—それら全てを含むものがカイン・コンプレックスなのである。一個の生きた人間を理解しつくすことが不可能なように、コンプレックスを理解しつくすことはない。」<sup>[37]</sup>

以上までが、深層心理学におけるきょうだいをどのように扱ってきたかを、2大創始者フロイトとユングの観点から簡単にみてきた。ここで深層心理学の範疇には入れられていないがフロイト自身は弟子と思っていたといわれるアドラーについて、少しでもふれておきたい。1. で記述したように、アブラモビッチや苦米地が「きょうだい」に関しての彼の研究をいちように評価しているからである。

### 3.4 アドラー心理学のきょうだいの扱い（家族布置）

深沢（2017）は、臨床心理学のほとんどのアプローチが、アセスメントにおいて家族の影響を重視しているように、アドラー心理学でも同じであるという。<sup>[38]</sup>ただ、一般的に重視されるのは親子関係、特に母子関係がクライアントへの影響において重視されるなか、家族構成員全体の関係性、すなわち「家族布置（family constellation）」<sup>[39]</sup>をみるという視点に立っている。具体的に「家族布置」では、親子関係、特に乳幼児期の発達の様子や親の育児態度に加えて、きょうだい関係をかなり考慮する。

きょうだいがいない場合も含めて、子どもの性格形成にかなり大きい影響を与えるものとみる。それゆえ、アドラー派のカウンセリングでは、クライアントがどのような家庭に育って、どのような親だったか、その親をどのように思っているかを聴くことに加えて、兄弟中の何番目か、それらをどのように見ていたか、その中でどのように行動していたかをかなり

丁寧尋ねる。その目安として、出生順位、家族価値・家族の雰囲気などがどのようであったか、親、きょうだい全員について聴取する。

これらのことから、アブラモビッチが臨床場面において、もっときょうだいを扱うべきであるという主張と一致し、彼がなぜアドラーを評価しているかがわかる。どちらかというところ、アドラー心理学は個人心理学ともいわれるが、子育て、教育、人生論などが大衆向けというイメージで、臨床心理の専門家にはマイナーの存在であった。しかしながら、この研究によって、筆者も臨床心理学としてのアドラーの観点にふれるいい機会になった。また、家族療法のなかで、丁寧にきょうだいについても聴きとっていくことの意義の大きさを確信した。

#### 4. 結論

以上、旧約聖書の創世記は、筆者にとって、人類の発達、すなわちアダムとイブと2人の息子の核家族からアブラハムのような大家族の発展におけるきょうだい間の葛藤を、また個人の生物・心理社会的にみる発達にからむ兄弟間の葛藤をみてとることができる。その方法にはいろいろな方向から研究出来るかと思うが、深層心理学の観点から理論分析することはかなり興味深い。聖書は貴重な史料である。そこで表現されたカインとアベルの物語は、「農耕民族と遊牧民族との確執を表している」<sup>[40]</sup>との解釈もあり、今なお中東（否世界中）での宗教を巡る民族や部族衝突にもつながるが、その元型にきょうだい間葛藤をみることができよう。

対象関係論において、母子相互作用に重点がおかれて、きょうだい忘れ去られているだけでなく、心理学の他の分野においてもこれからということがわかった。生涯発達の発達理論でよく知られているエリクソンでさえ、各発達段階における諸相における「重要な関係の範囲」では、遊戯期において「基本家族」とあり、確かによく遊ぶ相手としてのきょうだいが含まれている可能性がこめられているのかもしれないが、明確に「きょうだい」とされていない。きょうだいは重要視されていないといつてよいであろう。

すでに述べたように、心理学の分野でのきょうだい研究は始まって日が浅いといえる。本論はその扉を開けたばかりの行為である。それでもきょうだいとは何かの結論はこれからであるが、今まで漠然と疑問に思っていたことが、理論的に考察できた意義は大きかった。きょうだいを研究することの切り口に何をもって来るか、これからも続けていきたいと考える。

「おい、そのきょうだい」という呼びかけ、「あなたはまるで私の姉のようです」という賛辞。マフィアや任侠から修道女（シスター）まで、血のつながりがないが堅い結束、きずなや信頼で結ばれる親密な関係に「きょうだい」の呼称が使われる。海外の政治をみても、英国イギリス政府とアイルランド政府の協力によって1998年に「グッドフライデー合意」がなされたが、民主統一党のマクギネスはそれまで対極的な立場にあったアイルランド自治政府の党首ペースリーと、副主席大臣として個人的な信頼関係を築き上げたが、この二人は「クスクス笑いの兄弟」と呼ばれていたという。また、最近のフランスではギアナ市民

による団体「500人のきょうだい」という名前で、ゼネストを実行していた。地球上の人類愛を説くのに、「きょうだい」はしばしば必要な概念であろう。しかし、本論でみてきたように旧約聖書は人間というものは「きょうだいを殺す」こともあることを早くに知らせていた。動物界にみてもわかるように、サバンナに棲むハイエナは果てしない姉妹のライバル抗争を実行している。カラハリ砂漠のミーアキャットも、マダガスカルに生息するキツネザルも然り、メスがリーダーであり、その姉妹は下剋上の可能性もあって、リーダーは姉妹を攻撃して子ども巻き込んで殺す場合がある。猛禽類のワシの仲間も、かならず2つの卵が孵化され、1羽の強い方がもう1羽を巣から突き落とすことが知られている。これらは生存競争に関連することであるが、進化生物学の知見からきょうだい殺しが動物界でいかに共通しているか、つまり人間の場合も同様であると驚かないのであろう。

しかしながら、もしある人物に嫌いなきょうだいがいたら、その人物はきょうだい殺しになる可能性はあるが、関係を修復して親の死後も人生が続くかぎり、きょうだいのきずなを深めることもできるのが人間ではないだろうか。特に同性の年齢が近いきょうだいは、友人以上に自分を知っていて、確かにある種双生児に近い親密性がある。今、振り返り、きょうだいの葛藤もいまだ消えないが、すでにきょうだいの1人でも亡くした友人や知人の経験する喪失感に、将来そのような喪失があることは想像もしたくない。

きょうだいがいなかったらという自問自答をしたとき、筆者は何と答えるであろう。今よりずっとよかったという答えはないと断言できよう。

きょうだいがいないとまずいことでもなく、かといって「きょうだいは他人の始まり」と1人っ子がいいということでもない。きょうだい葛藤を理解することで、現代のきょうだい間の諸問題を検討するてがかりとし、また臨床に応用していきたいと考える。

## 5. 今後の展望

著者はこの10年間ほど家族間の言語的コミュニケーションについて調査・研究を重ねてきた。独自の調査では、言語的コミュニケーションを携帯電話でとる対象に、同胞（きょうだい）を選択する人が予想以上に多かった。<sup>[4]</sup>しかしながら、その調査票の問題点は、調査協力者が現実に何人きょうだいで何人と言語的コミュニケーションをとりたいかを正確に調査したものではないことにある。今後は従来の調査票を修正するなり、新しい調査を計画する必要がある。すでに大学生や一般の成人を対象に、きょうだいに関するアンケートやインタビューをパイロットで始めている。家族療法の分野におき、最近では研究と臨床の剥離を超えた新しい試みとして、より臨床を細やかな目で捉える「質的研究」や量的と質的の両方のアプローチを取り入れている「混合研究」がある。筆者としては、まさにそこを目指したいと考えている。同時にアブラモビッチが提案しているように、臨床家として自分の出生順位を変えてきょうだい役割を取るトレーニングをするなど、臨床場面でのクライアントのきょうだいコンプレックスや傷つきをより理解して、家族支援の助けにしていきたいと考える。了

## 凡例

聖書 新共同訳 日本聖書協会 Japan Bible Society 1987, 1988

JBS 書名 略語 章数 ページ

創世記 創 6 旧8

レビ記 レビ

署名 略語 Chapter page

Brothers and Sisters MYTH AND REALITY B&S C 7 p136

(Henry Abramovitch)

## 引用文献・注

- [1] 読売新聞 2016年8月18日(木)朝刊 1面より
- [2] 東野圭吾、藤井政治、櫻井よし子、呉智英ほか「復讐はなぜ許されないのか 特集・犯罪被害者の声を聞け」p33, 中央公論1452号、中央公論新社 2005年
- [3] 旧約聖書：元来ユダヤ教の経典であり、キリスト教徒は福音書その他を経典としたとき、それを新しい契約の書とし(神と人との約束)、ユダヤ教の経典をキリストの準備の書としてこれも経典に加えこれを古い契約と呼んだ。

『旧約聖書』は、律法、預言書、諸書の三部に分かれる。律法はモーセ五書ともいわれ、天地創造の話から、イスラエルの民祖アブラハム、イサク、ヤコブを中心とする神ヤハウェと民イスラエルとの特別の契約の物語、モーセによるエジプト脱出および律法授与の物語、申命記法と祭司法典を主軸とする律法とからなる。預言書は三つの大予言書と十二の小預言書よりなる。これらを経典に加えたとき、モーセ以後の伝説をふくむ士師時代の歴史、および歴代の王を中心とする歴史書をその前におき、これを前預言書とし、本来の預言者の書を後預言書と呼んだ。預言者によってイスラエルの民俗宗教には公正という倫理観が付与された。諸書は、詩文学、格言集をふくむ知恵文学、黙示文学その他から成り、前3世紀、今日に形に近く編纂され、ギリシア訳(セプタギントウア)も作られたが、1世紀末、現在の39書に定められた。(小口偉一、堀一郎 監修『宗教学辞典』, 東京大学出版会, pp146-147, 1973年)

- [4] Henry Abramovitch, *Brothers and Sisters MYTH AND REALITY*, Texas A&M University Press First edition 2014

日本心理臨床学会第35回秋季大会(2016.9.4)で開催されたシンポジウム「文化のトラウマとその癒し・世界における心理臨床法家のアプローチ」においてAbramovitch氏の存在を知り、本書を引用するに至る。本論文の日本語訳は筆者の拙訳によるものである。

Henry Abramovitch: テルアヴィブ医科大学教授 臨床心理士 ユング派分析家 イスラエル在住(1950~)

当日の氏の演題は「文化間紛争に動く兄弟コンプレックス」であった。

- [5] カイン・コンプレックス: 1976年, Frances F.Schachter, Ellen Shore, Susan Feldman-Rotman, Ruth E. Marquis, and Susan Campbellによる“Sibling Deidentification,” *Developmental Psychology* 12(5): 418-27. のなかで初めて使われたことは明らかである。(B&S: C 7: p136)

また日本大百科全書(ニッポニカ)の解説: 同胞葛藤ともいう。『旧約聖書』の「創世記」によれば、アダムとエバ(イブ)の長子として生まれたカインは(中略)このことから精神分析では、兄弟間の競争心、敵意、攻撃のことをカイン・コンプレックスという。一般的には、親の愛情や

承認を独占しようとすることをいう。兄弟コンプレックスともよばれるが、エディプス・コンプレックスの側面を強調するものである。フロイトは、文豪ゲーテの幼児記憶をもとに、一見いたずらとみられるような子供の行為に同胞に対する無意識的な嫉妬、憎しみ、排除の願望が隠されていることを明らかにしている。下に弟・妹が生まれたときに上の子が赤ちゃんに戻ったかのような行動をとる「赤ちゃん返り」も同胞葛藤の一つの現れである。[外林大作・川幡政道] 出典／小学館 日本大百科全書

<https://kotobank.jp/word/%E3%82%AB%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%83%97%E3%83%AC%E3%83%83%E> (2017.3.24検索)

→ エディプス・コンプレックス：フロイト, S. が提唱した無意識心理に関する精神分析の基本概念の一つ。子どもが両親に対して抱く愛と憎しみと恐怖を中心として発展する観念複合体。二種類あり、陽性のもものでは、異性の親に性的愛情を抱いて同性の親に嫉妬や憎しみや恐怖を抱く。陰性のもものでは、この逆に同性の親に愛情を抱いて異性の親に憎しみを抱く。実際には、この二つは種々の度合いで併存し、男の子が父親に女性的な優しい態度をとったり、母親に嫉妬的態度をとったりすることもある。これは、自我がこのコンプレックスにどのように対処し、どう解決しようとしているかによって規定される。(中略) ギリシアの『エディプス王』の悲劇(ソフォクレス作)に由来している。(中略) 性格形成と深く関わるが、その他にも性的同一性の確立、超自我や自我理想の形成、神経症の発症とも重要な関連をもち、精神分析の要となっている。(馬場謙一)(加藤正明、保崎秀夫、笠原嘉ほか編集委員『精神医学辞典』, 弘文堂, p73, 2001年)

[6] [www.moj.go.jp/content/00112398.pdf](http://www.moj.go.jp/content/00112398.pdf) (2017.3.24検索)

[7] [www.news-postseven.com/archives/2014.12.25\\_2913.html](http://www.news-postseven.com/archives/2014.12.25_2913.html) (2017.3.24検索)

[8] 深層心理学：【英】depth psychology 精神分析学、無意識の心理学等を表す古い用語。フロイトは『無意識について』の中で、精神分析は「精神過程の力動的な見解によって、心理学と区別されて」きたが、さらに「心理的局所を考」することで、「深層心理学と名づけられた」と述べている。…中略…フロイトは神経症者を対象にして、条理と不条理との連続性を切り開くとともに、それによって人間の心をいっそう統合的にとらえることを可能にした。(ライクロフト, C 山口泰司 訳『精神分析学辞典』, 河出書房新社, p111, 1995年再版)

[9] ユング, C.G.: (1875-1961) スイスの心理学者。無意識を二層に分けて、個人的無意識と集合的無意識を置いた。また、治療に夢分析を用いることに重要性を説いた。なお、フロイトは、集合的無意識の概念を否定した。

フロイトとユングの関係：1900年、フロイトは夢が科学的に分析対象になることと、無意識の存在を精微に示した『夢解釈』を出版する。これに感銘したユングは、1907年フロイトに手紙を送り、ほどなくユーンで面会し、8年近く文通を続け互いの思想を語り合う。

フロイトは非ユダヤ人のユングを重用し、精神分析をユダヤ人だけではなく、世界に評価してもらうため、自分の息子のごとく接した。

しかし、ユングは、フロイトが性的欲求を重視し、オカルティズムに反対だったため、徐々に距離を置く、やがて、心の問題は性欲だけが原因ではないと主張し性欲説を退ける。これにより二人の意見の相違は決定的になり、1913年に二人の蜜月は終わりを告げる。フロイトと訣別すると、一時的に深刻な精神の危機を体験するが、自身を分析し、無意識と対話することで、人類に共通する無意識、すなわち「元型」の概念を導入するに至る。(立木康介監修『フロイトの精神分析』, 日本文芸社, p270, 2007年第4刷)

[10] フロイト, S.: (1856-1939) チェコスロバキア領モラヴィア地方の小都市フライベルクに、ユダヤ商人の息子として生まれ、4歳からウィーンに住んだ。1873年にウィーン大学医学部入学、1881



年卒業。フロイトの功績は多大であるが、ことに人格発達に関わる理論はめざましいものがある。特に小児性欲の考え方は、発達研究者の目を人生早期に向けさせたという点で大きい。思想家フロイトの影響は医学領域を超えて、社会科学の各分野から広く現代思想・哲学に多大な影響を及ぼした。(小此木啓吾)(加藤正明、保崎秀夫、笠原嘉ほか 編集委員『精神医学辞典』, 弘文堂, p891, 2001年)

- [11] CiNii:「Article-日本の論文をさがす」では、学協会刊行物、大学研究紀要、国立国会図書館の雑誌記事索引データベースなどの学術論文情報が検索できる。Site:cinii.ac.jpSINII (2017年9月19日検索)
- [12] J-STAGE:日本科学技術情報発信・流通総合システム  
[https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/001\\_jp\\_menu\\_html](https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/001_jp_menu_html) (2017年9月19日検索)
- [13] 諸井薫「カイン・コンプレックス(新・如是我聞—26—)」, 『諸君』24(5), 大修館書店, pp160~163, 1992年
- [14] 小谷裕幸「昔話・神話に見られるカイン・コンプレックス」鹿兒島大学法文学編『人文学科論集(60)』, pp1~24, 2004年
- [15] 「カイン・コンプレックスに見る兄弟葛藤の意味—自尊心の傷つきは何をもたらすか(特集 兄弟姉妹の研究—今月は兄弟編)『プシコ』5(4)(通号43), ポプラ社, pp22-27, 2004年
- [16] 苦米地なつ帆 キョウダイの教育達成格差が生じるメカニズムの理論的考察, 「東北学院教育学研究年報」, 第62集・第1号, p69-70, 2013年
- [17] 定位家族: 原家族ともいう。family of origin 両親と血縁。通常は自分が生まれた核家族。(日本家族研究・家族療法学会編集『家族療法テキストブック』 p360, 2014年第2刷)
- [18] アドラー, A:(1870-1937) 個人心理学の創始者。人間は何らかの形で心理的・身体的劣等感を持つものであり、このコンプレックスを克服するために権力への意志を持つと考えた。フロイトに師事していたが、1911年に性的体験説をとるフロイトと決別する。アドラーは、人々が未来の達成目標を当人と他者との関係、問題解決の行動、そして自ら設定した目標からなる「ライフスタイル」と呼んだ。彼は生物学的な要因よりも社会的な対人関係を、そして性欲よりも自己実現の努力を重視し、障害物を乗り越えて目標をみざすと考えた。(立木康介監修『フロイトの精神分析』, 日本文芸社, p280, 2007年第4刷)
- [19] 平山亮, 古川雅子『きょうだいリスク』朝日新書, 朝日出版社, pp159-162, 2016年
- [20] きょうだい格差: 同じ家の子どもの中に、所得の違いを超え、その違いを生じさせるもの(学歴や職種など)、その違いから生じるもの(ライフスタイルや社会関係など)のすべてをひっくり返して、日々の暮らしそのものの違いになって現れる。また、それは必ずしも個人の方ではその違いを解消できない。格差研究の中心は、おとなになってからのきょうだいの格差は中心的なテーマになっていない。主に世代間、親世代と子世代が主なテーマになっている。(既出書, 平山亮, 古川雅子『きょうだいリスク』朝日新書, 朝日出版社, pp56-58, 2016年)
- [21] 本論3.2において詳述している。旧約聖書・レビ書の16章「贖罪の日」の二匹の雄山羊のうち、くじで一匹は捧げ物で焼き尽くすもの、もう一匹は生きのまま荒野に追いやるものとするが、後者をスケープゴートという。  
 しかし現在では一般的には次のように理解されている。  
 「『いけにえ』のこと。現在ではスケープゴートになった子を一緒にいじめるという行為によって、互いの共通点を見出し、かろうじて集団を維持しようとする」(下山晴彦監修『臨床心理学』, p112, 西東社, 2016年第5刷)
- [22] リビドー: LIBIDO 心の、さまざまな過程、構造、および対象表象が帯びるとされる、仮説上の

心的エネルギー形態のこと。リビドーは、身体もしくはイドという源から発して、特定の性欲待に結びついて多様な形（すなわち、口唇リビドー、肛門リビドー、性器リビドーなど）をとって存在し、「リビドー化されlibidinized」たり「リビドー補給 libidinal cathexis」を受けたりする多様な構造や過程の間で分配される、と考えられている。（ライクロフト、C、山口泰司訳、『精神分析学辞典』、河出書房新社、p212、1995年再版）

- [23] 太母：great mother ユングの元型の1つ。人をはぐくみ育てると同時に、ときのみこんでしまう「母なるもの」のこと（金子隆芳、台利夫、穂山貞登 編集『多項目 心理学事典』、教育出版、1966年 第2刷）
- [24] 母子相互作用：mother-child interaction 母子相互作用は初めボウルビー J. Bowlbyが愛着理論において使用した用語であり、乳幼児の対象関係が生じる基礎である。母子相互作用の要因の中でも、エインズワースM.Ainsworthは母親の感受性が子の愛着の性質に重要であることを研究した。母親が子の欲求を的確に感じとり応答する場合、子は母親を安心して依存できる対象、自己を愛され理解される存在と感じ安定した対象関係を発達させる。一方、母親が子の欲求に鈍感であったり、取り違えたり、拒否的であると、子は不安で欲求を出せなくなったり、自己の欲求や存在を肯定的に実感することができなくなり対象関係の発達が阻害される。（渡辺久子）（加藤正明、保崎秀夫、笠原嘉ほか編集委員『精神医学辞典』、弘文堂、2001年、p731）
- [25] Midrash:ミドラッシュ 1. 伝統的なユダヤ教の解釈による旧約聖書に関する説教；普通聖書の朗読を伴う。 2. 紀元400年から1200年にかけて書かれたそのような説教（『ジーニアス英和大辞典』電子辞書word tank 2017年4月1日検索）
- [26] ヤコブ：天使と戦い勝ってイスラエルの称号を得る。イスラエルの祖先。
- [27] ドレの旧約聖書：谷口江里也 訳・構成宝島社、2010年  
版画家ドレの押画155点が収録されている。
- [28] シュタイナー、R「カインとアベルの対立」『神殿伝説と黄金伝説』、高橋巖ほか訳国書刊行会、pp31-36、2015年、新装版  
シュタイナー、R（1861-1925）：ルドルフ・シュタイナーはハンガリーのクラリエヴェック（現クロアチア領）に生まれる。ウイーン工科大学卒業。ゲーテ学者、哲学者として活躍したのち、「人間存在のなかの精神的なものを宇宙のなかの霊的なものに導こうとするひとつの認識の道」である人智学を樹立。霊学的観点から新たな総合文化の必要性を説き、その影響は宗教、芸術、教育、医療、農法など広範な分野に及ぶ。『神智学』『アカシャ年代記より』『ルカ福音書』など著書、講演など多数。
- [29] エリクソン、E.H.：「アイデンティティ」概念で有名である。フロイトの系譜でありながら、フロイトの発達理論を発展させて独自の発達理論を確立した。精神社会的な発達段階を8段階に分けて、漸成という独自の意味を含ませている。
- [30] ワデル、M 第9章 スケープゴート、アンダーソン,R. アンダーソン、A.編、鈴木龍監訳『思春期を生きぬく 思春期危機の臨床実践』、岩崎学術出版社、p166、p169、p172-177、p179-180、p182-183、2000年
- [31] エンジェル、G. L. 「心身の力動的発達」、小此木啓吾、北田穰乃介、馬場謙一編、慶大医学部精神分析研究グループ訳、岩崎学術出版社、pp253-262、pp334-344、1980年、第5刷
- [32] 既出。「カイン・コンプレックスに見る兄弟葛藤の意味—自尊心の傷つきは何をもたらすか（特集 兄弟姉妹の研究—今月は兄弟編）『プシコ』5（4）（通号43）、ポプラ社、p22、2004年
- [33] フロイト、S 『フロイト著作集（3）』新宮一成監修、岩波書店、「『詩と真実』中の幼年時代の一記憶」、pp.318-326 2010年、第25刷

- [34] エディプス・コンプレックス：[5] の→以下参照されたい。
- [35] 小谷裕幸（既出）[14], pp.18-19
- [36] 河合隼雄 『コンプレックス』, 岩波書店, p30 2017年, 第65刷
- [37] 河合隼雄 同書, p134
- [38] 鈴木義也 八巻秀, 深沢孝之, 鈴木義也著, 第3章 見立て, 『臨床アドラー心理学のすすめ』, pp57-59, 遠見書房, 2017年
- [39] 家族布置：constellation 星座の位置。ユング派がいうコンステレーションと同じ言葉である。星の並び方によって人生の解釈が異なるように、出生順位としての兄弟の配置によって人生が異なってくるという見方。
- [40] 注 [28] 参照されたい。
- [41] 菅野陽子, 家族間コミュニケーションを査定する調査票の検討, 『浦和論叢』, 55号, pp35-39, 2016年

#### 参考文献

1. 荒牧草平・平沢和司, 「教育達成に対する家族構造の効果『世代間伝達』と『世代内配分』に着目して」稲葉昭英、保田時男、田淵六郎ほか [編] 『日本の家族1990-2009 全国家族調査 [NFRJ] による計量社会学』, 東京大学出版, pp93-112, 2016年
2. 生島浩, 「リスク・ファミリーの臨床」, 『家族療法研究』第27巻第3号, 日本家族研究・家族療法学会, 2010年
3. 小此木啓吾 『精神分析は語る フロイトから現代へ』, 青土社, 1995年
4. サティ, I. D著 國分康孝, 國分久子, 細井八重子他訳 『愛憎の起源』, 黎明書房, 2000年
5. フロイト, G. 小此木啓吾訳 『精神分析療法』, 日本教文社, 1976年, 再改定版
6. 山本七平 『聖書の常識』, 講談社, 1980年, 第4刷
7. 鈴木義也, 八巻秀, 深沢孝之著, 『アドラー臨床心理学入門』, アルテ, 2017年

## Summary

A new perspective on the psychological study of siblings  
— The significance of the Cain Complex —

Yoko Sugano

The author has always been intrigued by the Old Testament story of “Cain and Abel.” It is interesting first of all because it tells us that the first murder of mankind occurred between siblings. Secondly, when God banished Cain to the wilderness after he killed his younger brother Abel, He set a mark on him so that no one would kill him. Thus he survived and his descendants prospered. It is considered that all these aspects are reflected in Christian thought. The complex psychological relations between siblings seen in the Old Testament, known as “the Cain Complex”, are taken up here and examined. With the sibling relationship in present-day Japan, an additional social problem has emerged, the question of who should support a sibling unable to live independently after the parents die. Therefore it is timely and insightful to reconsider the sibling relationship from the point of view of Depth Psychology.

**Keywords** Old Testament, siblings, Cain Complex, Depth Psychology

(2017年11月16日受領)



